

---

**本業：学生、副業：勇者と魔王やっとります（前、俺のジョブは勇者と魔王）**

ポチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

本業：学生、副業：勇者と魔王やっとります（前、俺のジョブは勇者と魔王）

### 【Nコード】

N5305Z

### 【作者名】

ポチ

### 【あらすじ】

とある世界のとある領土。そこは魔族と人間達が互いを認め合わず殺しあっていた。そんな世界とは関係ないはずだったのにあの日全てが狂った。

タイトルが変わってる？気にするな！

## 第1話 召喚の準備

「くそ！ 魔族どもめ……」

狭い部屋の中で男は声を荒らげて叫んだ

「王様……やはり我々が魔族を滅ぼすことは不可能では？」

一人の老人が呟くように言った

「……だが今更後にはひけん。それに今回は連合国家の獣人族にエルフま

でいるのだ。しかも獣人族の中でも名高いウォルド・グラウに、魔法使

いの中でもトップを争うほどのエルフ、エル・ベレン、さらにはこの私

剣士としては超有名なラッシュ・ソルドまでいるのですぞ！」

自信満々に言う男

「……ですがラッシュ、あなたは一つ忘れております。……エル殿にウォル

ド殿は先程の戦いで重傷を負い戦場にはでられません。」

これを言ったのは服装的に看護師的存在の女だった  
暫く長い沈黙が続いた。そこへ

「お父様……勇者を、勇者を召喚しましょう。」

国の第2王女ネル・ゲヴィッターヴォルケは言う

「ネルよ、勇者を召喚するとゆうことがどうゆうことか分かっているの  
だな？」

勇者を呼ぶには魔方陣が必要。善の言葉で綴られた魔方陣に大量の  
魔力、そして勇者に必要な力を得るための犠牲……勇者を召喚する者の命……

「私は国で唯一勇者を召喚する力をもつ者です。魔族との戦争が始  
まった時か

ら覚悟は決めておりました。」

彼女の目は覚悟を決めていた

「ならばさっさと召喚せよ。」

実の娘が国、いや父のために自分の命を犠牲にして勇者を召喚する  
と言っていた

るのだ。その娘に対し王は冷たく言い放った。

少しは自分のことを失うのが悲しい、などの言葉を発してくれるの  
かと期待し

ていたネルの目には傷ついた様子が現れていた。

（さっさと召喚しろ……か、やはり私は父にとってただの道具、戦  
争に勝った

めの勇者を召喚できる以外には必要とされない『道具』だったの  
ですね……

でも姉さまや妹達、国民のためにも私は勇者を召喚する！（

彼女の決意は硬かった、たとえ父に道具と思われていると分かって  
も

【SIDE 魔族】

「なんとゆうことだ……」

同胞　魔族の大量の死体を見て彼　デヴォルム・デモニックは  
言った

「隊長！　人間達が勇者を召喚しようとしているとのこと！」

魔族の兵士がデヴォルムに告げる

「勇者か……人間どもはそこまでして我ら魔族を滅ぼしたいか。…  
…皆に伝え

よ、勇者召喚に対抗し、我らは『魔王』を召喚する！」

魔王の召喚も勇者召喚と大して条件は変わらない。変わるのは魔法  
陣に使う文

字が「善」から「悪」に変わること、高い魔力がいる。さらに勇  
者と違い命

でわなく魔力を奪い取るため体、書く器官、細胞などのいろんなこ  
とを具現化

するためには一人の命では足りない、足りたとしたら魔王など必要  
ないだろう

「生贄は？」

そう問いかける兵士に

「敵対していた魔神達を捉えたはずだ。奴らを生贄に捧げれば十分足りる。」

「足りんようなら私の娘でも生贄に捧げろ」

さすがは魔族の全軍を指揮する隊長。彼には生贄を、娘を惜しむ気持がなかった。

ネルの父もそうだったが……

## 第1話 召喚の準備（後書き）

エルフや獣人は魔族じゃないのか？とゆうことでここで補足します><

エルフや獣人など『善』の感情をもったものは魔族ではなく『ハーフ』 人間と魔族の混合、に分類されています  
仮にエルフが『悪』の感情を持ち大きくなるとエルフからダークエルフとかわり魔族に分類されるようになります。

要は善か悪かとゆうことですな

## 第2話 召喚された青年

夜、人間と魔族は召喚の準備を始めた。  
勇者には善、魔王には悪。  
そして魔方阵が作られた。

「聖なる力よ闇を払いて」

「闇の力よ聖を犯し」

「正義の力で我らを守れ」

「破壊の力で全てを壊せ」

「もしも我らが悪に犯されたなら  
れたなら」

「もしもわれらが聖に浄化さ

「「汝の力で葬りされ」」

二つの種族の言葉が重なった  
次の瞬間、二筋の光が魔方阵からでて生贄、召喚士はきえた。ここ  
までは普通  
どおりだった。いや二つの詠唱が重なってしまった時からすでに普  
通ではなか  
ったが。

それぞれの魔方阵から発していた光が徐々に近ずき合うように戦場  
の真ん中に  
動いていく。当然いままで勇者や魔王が召喚されることは稀だった  
ためそれが  
普通だと思っていた。そして……二つの光が重なり広がり魔方阵を  
書いてゆく

片面には『悪』 Chaos（混沌）

B?ser（悪）

H a s s (憎悪) ……

片面には『聖』 F r i e d e n (平和) L i c h t r e f l

e x i o n (光) W u n s c h (希望) ……

おかしかった。あきらかに……

そして光が消えなから一人の青年があらわれた。

「魔王様！」 「勇者様！」

声が重なる。魔族と人間はそれぞれのお互いに見つめ合う。

ここで勇者か魔王、どっちが召喚されたのかで勝利はきまる。

「絶対勇者様にきまっている！ そうでございましょう？勇者様」

「ふっ馬鹿な……我らが魔王様に決まっておるわ！」

互いに言い合う。まだだれもおかしいとは思っていなかった。  
生贄が起き上がるまで……

「あ、あれ？私は勇者様を召喚するとき死んだはず。」

ネルだった。生贄となつたはずの彼女はなぜか動けた。意識もあつた。

周りを見るとみんなが啞然として私をみている。

「な、なん、で？」

同じように魔王召喚で生贄となつた者たちも生き返っていた。  
ここにきて初めてみんながおもつた

(おかしい！)

そしていそいで魔方陣から出てきた青年を見る。

そこには黒髪、黒目、右手に善の魔方陣、左手に悪の魔方陣をもつ青年がいた

「お、お前は一体なんなんだ？ま、魔王か？それとも勇者か？」

## 第2話 召喚された青年（後書き）

誤字、脱字とう感想があったら報告くださいますし、><

### 第3話 よびだされた青年

#### 【SIDE 謎の青年】

「お〜い！ 勇也。」

向こうから俺を呼ぶ声がする。

俺の名前は魔藤<sup>まどう</sup>勇也<sup>ゆうや</sup>中学三年15歳……とだれに自己紹介してんだ？

「勇也！ むしすんなよ〜」

向こうから拗ねた表情で走ってくる男。

「ああ、わりい。ちょっと考え事してた」

俺がそう言つと、まあいいけどという感じの表情でみてきた。

「それより勇也、いいのか？こんなところで道草食って？」

「？今日なんかあつたっけ？」

俺の問いに男 悟はありえない！ と言いたげな感じで見えてきた。

「お、おま……今日は裕也の幼馴染かつ彼女の彩香の誕生日だろ！  
？」

……や、やばい……わ、わす

「忘れてた、とか言わないよね？」

なんだよ！その俺を攻めるような目！や、やめてくれ！

「ま、まさか！ 忘れるわけねーじゃんか。あは、アハハハ」

嘘だね、つと悟に言われてたのは気のせいだろう。

「おっそ~~~~~い！！！」

彩香に怒鳴られる

「ま・さ・か忘れてたんじゃないわよね？」

「ご、ごめんなさい。忘れておりました。」

なんでもするからその笑顔でおれを殺そうとするのはやめてくださ  
い……

「わ、わるかったって！」

「あ！ やっぱ忘れてたんじゃん！」

俺の言葉を聞いて悟が追い打ちをかける

ちなみにこのあとご馳走にありつくまでに彩香に冷たい視線で見ら  
れてた気が

するのは気づいてないことにしておいた。

「まったく……幼馴染の誕生日忘れるとかサイテーだよ！」

完全に拗ねた彩香。その姿はともかわいらしく後ろから襲いかか

……げふんげふん

「いや、本当悪かったって。」

じつと、と見てくる彩香。

「あーはっ！ ほらプレゼントやるから、な？」

と、もので釣ってみることに。

「……プレゼント用意するのはフツーだよな？」

おっとバレたか……

「じゃあいらない？」

少し、いじめてみるか……

「いる！」

即答だった。

「でもな、彩香いつまでもすねてるしな」

チラッと彩香をみると焦ってますねてないアピール。本当にかわいい。

「え????な、なんのことかな」

笑顔で顔してくる。……ま、可愛いそうだしここまでかな

「わかったよ。ほら」

と言ってペンダントを渡した

「こ、これってたしか去年欲しいなって言ってた……覚えててくれたの？」

彼女の問いに笑顔で返す

……きざとか思うなよ？

そして楽しいパーティーもおわった。夜も老けたから解散とゆうことで

そしてある出来事が起こった

家の鍵を開けてなかに入る。親も夜遅いからもう寝ているのだろう

俺もさっさと寝るか……

風呂にはいって寝よう！とおもって服を脱ぎ風呂場に行き湯船に浸かった

そして気がついたら

「お、お前は一体なんなんだ？ま、魔王か？それとも勇者か？」

鎧をきた兵士や何かのコスチュームなのかしつぽや耳が生えた人たちに囲まれていた  
もちろん全裸の状態で

(は？魔王？勇者？なにいつてんだ？)



第4話 勇者？魔王？（前書き）

更新

#### 第4話 勇者？魔王？

お、オワタ……全裸で何叫んでんですかって目で見られてる気がする。

女の方もいらつしやる！ああ、俺はここで変態ポケカスナスビとして語り継がれてゆくのかとか変なこと考えていると

「な、なんだ！？ 今あいつ何か叫んでなかったか？」

ん？俺は夢じゃねーと言ってただけですが？

「お、俺にはあ……あの叫び声が『グオオオオオオオオ！』て今までのどの魔物よりも恐ろしい雄叫びに聞こえたんだが！？」

いやいや……俺は、ね？そんなこといってないから

「や、やはり魔王様なのですね！」

……

「いや魔王も何も俺……ただの中学の子」

「ま、魔王だあああああ！ あ、あいつは俺たちを殺す歓喜の雄叫びを

上げていたんだあああ！」

「くそおお！ ネル……この！ バカ娘があああああ！」



やつでも

人には変わりない。だが、魔王にもなる気はないし変な戦争に巻き込まれんなら

勇者にもなりたくねえ。

「俺はお前らどっちの味方にも付く気はねえ！ 俺は……中立だ！

」

唸るように言う。いや実際にはあいつらにはうなってるようにしか聞こえんのだが……  
戦場が一瞬で静まり返った。その沈黙を破ったのはデヴォルムだった。

「？なにを言っておられるのかは分かりませんが、あなたはたった今人を殺し悪に染まった！

召喚の契約に従い我らの駒とな

」

彼が言えたのはそこまでだった。なぜかって？生贄にされていた魔神達が

自由になっていることをわすれスキだらけだったから。生贄にした娘に心臓を貫かれたから。

ゴフツ……そんな言葉があつてあつてあつて。

「な、なにを、する？ふら……む」

フラムとは多分娘の名前。

「なにをですって？みてわかりません、お父様」

彼女の目は冷たく父を見据えていた。  
いや、うん自分の娘生贖にするって……ほんとひでえな。  
その残虐さは人間のやつもかわんねーか……

「さようなら」

彼女は言った。そして剣を抜き取り一刀両断……  
さすがにこのあとどうなったかは見る勇気がでなかった

「さて……魔王様……いえ勇者様かしら？」

そついやまだ名前行ってなかったんだっけ……あ、  
言っても無駄なのか。

「……」

「ああ！そついえばあなたは言葉がはなせないのでしたね……  
『全てを理解し、全てを悟れ！』 「翻訳」 『 「

フラムがなにかを唱える。

「？なにをしたんだ？」

「あなたの言葉をこつちでもわかるようにしたのよ」

え？てことはやっと話が通じるのか！

「そ、そうか……最初に言っておくが俺は勇者でも魔王でもない！

」

「いいえ、あなたは勇者、そして魔王の召喚儀式で同時に呼び出された。」

あなたは勇者と魔王その両方の力をもって召喚されたのです。あなたが

魔王、勇者どっちになるかはあなたの心しだい。悪にそまればいつの日か

魔王に善にそまれば勇者に」

と、言ったのはフラムではなくネルだった。

「一つ聞いてもいいか？ここは……どこだ？俺の家はどこにある？」

「……あなたの知っている世界はここではありません。故にあなたの家は

別の世界にあります。あなたは魔族と人間の戦いの兵器、道具としてここ

ここに召喚されたのです。」

少しためらいながらもネルは言った

「……は？じゃあ何か？お前らのくだらん理由の戦争の『道具』にされるために

俺は家族や友人……恋人達とあえないってか？」

ふざけんな……俺は道具じゃねー。

感情が高ぶっていた。だからそのときは気づけなかった。自分が召喚され

手に入れた力が暴走してしまっていることに。

ふざけんな、ふざけんな、ふざけんな！

道具にするために俺から大切な人たちから引き離したのかよ？  
んでなんだ？召喚されたと同時に奴らを殺せ？私たちを守れ？  
知るか……

「うわあああああああああああああああ！」

『悪』と『善』の魔力が体中がでる。

そして、そこにあった全てのものを吸収していた……

第4話 勇者？魔王？（後書き）

なにげに唐突過ぎちゃってますが感想あったらください><

第5話 魔王に近づいちゃった (前書き)

誤字脱字等ありましたら報告ください

## 第5話 魔王に近づいちゃった

気がついたら周りには何もなくてただ黒い地面みたいなものが続いていた。

そして体の異変に気がついた。

善と悪の両方を吸収して彼の体は人と魔族が合体した感じだ  
髪は黒そして頭には二本の角、片方は折れている。

顔には右目の下に赤い線が入っており、ぱつと見すごく怖い。

体は胸の部分に召喚されたとき半分で別れていた魔方陣が悪、善交互で鳩の

上あたりにある。

手はそれぞれの手の甲に右は善、左は悪の文字で綴られた魔方陣がある。

足はとくに変化はみあたらない。

かわりにケツからしっぽが生えていた……

あれだ……勇者と魔王で言われたけどこれじゃ魔王じゃね？

人間の部分多いけどさ……ぱつと見普通の魔族よりこえーじゃん！

善に染まれば勇者って言うってたし、人間になれるか？

だけど俺はあの馬鹿王ひとりじゃなく、まわりにいた奴ら全員消してしまった。

多分あいつらだけでも4、5万はいたんじゃないか？そいつら全員消してしまった。

だから魔王に近づいてしまったのか？うーむ……

「ま、そのうちわかるか……とりあえず今は地球に帰る方法を見つけないきゃな……」

最悪なことにも召喚した奴らも全員消してしまった。ここがどい  
うところなのかすら

まともに分からない上地球に帰る方法があるのかすらわからない。

「はあ〜悩んでも仕方ないしどっか町でもさがすか……」

さて？とりあえずどうやってここから動こうか……

体は浮いてるんだしこんまま飛べないもんかな〜

背中らへんに羽をイメージしてみた。すると……

メキッバキ！ ミシミシ！

と音を立てて羽が出てきた。

……予想外、でした。こ、今度から気を付けて実験していこ……  
とりあえず羽は出せたんだし町でもさがすか。

「よっつと」

羽を使い移動してみる。

うん、なかなか速いし、快適だな〜

こんまま空で暮らしてもOKだ

バン！

……あ、あぶな！

銃弾が頬をかすめた。

なにごと？ から来たのは間違えないけど……いつの間にか地上の  
あるところまで

出てたのか。やっぱりはやいね



よ？」

な、なんで俺が怒られた？

「いやいやまてまてその君、ボーイ、きみだよその男の子だよ。ヘイ！　なんでいきなり打たれた俺じゃなくて君が怒るんだい？」

ちよいつとバカみたいにきいてみた。

「…………どうなっているんだ？あの銃弾にはハーフ、魔族とわず一撃で殺せるように

魔法を付けていたんだが…………」

聞いちゃいねーよこのクソガキが！　しかもサラっときけんなこといつてるよね？

そんなもの人にむけちゃだめってなんと言ったらわかるの！

「ん？ああすまなかったな気にするな！　どうせ死んでないし、死んだとしても

痛みはなかったから！…………きつと」

おい…………死ななかったからいいって、ふざけんなよ？しかも痛みはないのあとに

ぼそつと多分ていつてなかった？ねえ？

「君にいくつか質問がある。君はハーフか？魔族か？」

そんな質問より俺の心の中の質問に答えて欲しい今日このごろ！  
使い方間違ってるのはあれだ！

スルーだ

「ハーフ？なんだそれ？俺は人間だ！ 訳あってこんな姿になっちゃまってんだよ！」

訳は話さない方がいいだろう

「ハーフをしらんのか？珍しいな……それ以前に人間とゆうことが信じられんが？」

さすがに人間てゆうのはむりがあったか

「あー、あれだ！ほら〜その〜、えーっと……！ 呪いだよ！」

咄嗟に出てきた言い訳その一 のろい！

「……嘘はよくないぞ？そんな呪いは聞いたことがないからね」

バレた！でもここで引き下がったら嘘と完全にバレちまう……

「世の中広いんだぜ？ ま、お前のようなチビガキじゃわかんないことだつてあるさ！」

しよげんな！と精一杯励ます。

「チビ……ガキ？……」

なんだろう？周りの温度が急に下がったような……

「 Eis (氷) regnen (降る) 」

？よく聞き取れな

「!??」

チビガキが何かを呟いた瞬間ちびガキの手に魔方陣が浮かんできた。

「【アイスランチャー】」

今度は聞き取れた。そして危険が察知できた。

いそいでさっきまでいた場所からどく。そしてそれが正しかったことが分かった。

チビガキの魔方陣からつららが無数に飛び出していた。

いくら体の傷が治っても痛いもんは痛い!

「なにすんだ!」

「うるさいなあ………僕のことをチビガキ扱いした報いですよ?」

この攻撃が終わったのはチビガキの魔力が切れたときだった。

「たく………ちびのくせ魔力多いんだな」

「何か言いましたか?」

おっと危ない。

「なんでもねーよ」

「そうですね、でわどっかの馬鹿のせいで遅くなりましたが自己紹介でも………」

遅そくなったのはお前のせいだぞ？

「僕は アイシクル・フルトニー、雪エルフです。」

雪エルフ？てゆうかエルフ？

「なんだ？エルフって？」

俺が質問すると呆れたように見られた。

「ハーフを知らない時点で馬鹿とは思っていましたがここまでとは……」

やれやれ、と仕草をする。

いつとくけど俺はまだ来て一日も経ってないんだからな？それで魔力とか使えるだけすごいことじゃない？

「エルフは魔法に優れた種族です。雪エルフとゆうのは普通のエルフと違い氷系の魔法が得意なんです。」

へーと思っっている俺。

ん！ いいこと考えた！

「なあ！ 俺に魔法の使い方教えてくれ！」

正しい使い方知らないとまた暴走か、あの痛さを味わうことになりそうだからね……

「その前に名前と種族を教えてください。……不審者、いや変質者を村に入れるわけには生きませんから」

不審者は分かるけどなんで変質者なんだ？……ん？

……そっか、そうだよね、俺……服着てなかった、テヘいまさら隠しても遅いか……

「あ、ああ、俺の名前は魔藤勇也、種族は前に言ったとおり人間だ！」

「だから嘘はだめですって！ 呪いと言っていましたけどそんな呪いはありません！」

「だーからー！ 世の中広いの！ 知らない呪いの一つや二つ絶対あるって！」

「いーえ！ ありません。なんなら僕が解呪してあげてもいいですよ！？ 僕は呪いは全て

解くことができるんですからね！」

「でもお前が知らない呪いなら解けないだろ！」

「解けなくてもものろいかどうかたしかめるだけでもいいんですよ！」

「そ、そのてがあつたかつてやべつつつ！」

ジトーと見てくる。

「ほーら、やっぱり嘘だ。どうやら見た目と違って脳はちっちゃい

ようですね」

うん、こいつむかつくは。

「で？ 魔法教えてくれんのか？」

話をそらす。

「あなたがなんの種族か教えてくれたらね」

くそ………そういや念じたら羽出せたんだからこの角とかしっぽしまえるか？

いや、やっぱりやめておこう………なんかまた痛そうなのがするし。

考えろ！ 角があつて羽もあり、なおかつしっぽがあるかつちよい種族！

うん！やっぱりあれしかないね！

「やっぱり隠すのは無理か………俺は………竜人族だ！」

………あれ？なにもいってこない。まさか竜人族なんていないのかな？

「な、りゅ、竜人、族？ あの200年前に滅びた？」

なんだ竜人滅びてたのか！だがいけるぞ！これは

「ああ………俺が竜人族とバレたら研究材料とかにされそうだな。この目立つ角と尻尾も

できれば隠したいんだがその………何分長い間氷結されてて魔力の使い方がよくわからなくなってる」

言い訳その二 氷結されてました！

「い、いえ！ はい喜んで教えいたします！」

態度が滅茶苦茶変わったな。

「あとできればなにか着るものが欲しいんだが」

さすがに素っ裸で移動するわけにはいかない。

「あ、はい、少々お待ちください！」

そうゆうとアイシクルは一瞬できえ一瞬で服をもって現れた。

「うお！ いまのは？」

「いまのはテレポートですけど？」

ヤベー、そんなのまであったのか。いや普通かな？

「ん、ああ！テレポートか。で？服は何かあったか？」

話を変えておこう。

「はい。お気に召すかわかりませんが……」

渡されたのは黒い服。全身真っ黒だ。

「ああ、サンキューな」

そういつて服を受け取り着た。

アイシクルの話ではここから村まではあまり離れていないとのこと。

「ああ、そいえば勇也様は竜人とばれたくないのですよね？」

様づけ……

「ああ」

「なら村に入る前に擬人化しておいたほうがいいですよ？」

ぎ、擬人化？なんだそりゃ……人に化けるのはわかる。やり方が分からん

でもさすがにこれは重要はことだしわかんないっていったら怪しまれるだろーなー  
しかたない……

角と尻尾を消し人間に近づくようなイメージをした。

ゴリゴリゴリ！

まるでげんこつをグリグリ手加減ナシでゴリラにされたみたいだった。

「うわぁ……魔力の込めすぎですよ。しまうときに魔力を使いすぎで体に負担が掛かってますよ？」

はは、ととりあえず笑ってごまかす。

「あ、ごじです。」

アイシクルが立ち止まった。  
そして俺は止まって前をみた。  
目の前には氷の山があった

「……これのどこが村？」

「？僕たち雪エルフは氷に慣れるため氷を素足であるいたりしないと  
いけないんですよ？勇也様はご存知ないのですか？」

え？そ、そうなのか。痛そ〜。

そう思って靴のまま村に入ろうとしたら

「だ、ダメですよ！ この村の掟で素足以外で村に入ったものは  
それが旅人だろうと神聖な場所を怪我したとみなされ凍らされた  
あと

砕かれちゃうんです！」

……なにそれ？巻き込まないで欲しいな〜

第6話 師匠に会おう！（前書き）

なんかタイトルと中身違う気が……  
ま、スルーで（え

## 第6話 師匠に会おう！

「な、なあ、裸足で氷の上を歩いていたくないのか？」

どうにかして裸足で歩くことを回避しなくては！

「そんなわけないですよ。僕たち雪エルフは寒さに強いのでこれくらい

なんともないですよ。」

な、なんともない？魔王と勇者の力を持つ俺でさえ裸足でこんなとこ歩けば

確実に痛くてたまらんし一歩あるくたんびにその痛さを味わわなきゃいけないのに……（傷は直る）

「それに勇也様は竜人族なんですから足は竜の鱗で寒さを感じてもそこまで

無いでしょうし、鱗は傷一つ付きもしないですよ。」

な、に？ヤバイぞ……竜といや鱗もあるんだった……ここで痛がつたり、

傷が付いたりしたら怪しまれちまう。どうすれば……

！ここは魔法の世界なんだしバリアぐらいあるはず！それを足に付ければ！

「な、なあバリアの張り方教えてくれないか？もし竜人とバレて捕まりそうになつたり

攻撃受けたりした時のためにも！」

本日も絶好調のいいわけ！

「バリア……ですか。バリアも基本中のはずなのですが。……まあ一応

教えときますね。たぶんそんなことはないでしょうが……。バリアの

張り方は、魔力を丸くして自分を覆いたいならそんなふうイメージして固める。平べったくしたいなら平べったくイメージするだけです」

へー、案外簡単だな。こりゃ炎とかをイメージして魔力を固めたら炎になったりして……ないか。アイシクルも呪文？みたいの唱えてたし

とりあえず足を覆うよう魔力をイメージ。

そしておそるおそる足を氷の上においてみた。

「おお！ 痛くない！」

成功。温度も冷えたりもせずちよおどいい感じ。

「あたりまえですよ。竜人なんですから」

俺は人間だけどな……

「さ、こんなところでみちくさくくわずにはやく師匠のところにいきましょ」

師匠？こいつが教えてくれるんじゃないのか？

こりゃバレないように気をつけなきゃな。

「ああ、頼む。」

こいつの師匠の家に着くのはかれこれ1時間かかった。なんでこんなにかかったのかは、……ご想像に任せよう。決してたまたま通りかかった女湯を覗こうとしていたわけではないからな？

絶対してないからな？俺は覗くなんて卑怯な真似はしない！

俺はただ女湯に侵入した、じゃない！したりするわけないじゃないか

「……勇也様ここです。」

アイシクルの目線が冷たいのは気のせいだろう

「そ、そうか」

なにはともあれバレなきゃいいけど……

ガラガラッ

アイシクルが戸を開ける。するとまず目にはいたのは……

18禁のビデオ、18禁の漫画、何に使ったのかわからんが大量の丸められた

ティッシュ。

「……ここにまともな人がいるのかい？」

不安になった。

だって、ね？いくらなんでもこれはないっしょ。

こう、師匠っていったらさもつと、ね？怖い感じのとか、へらへらしてんのに

めっちゃ強いとか、そんな感じじゃん？

なのに……見事に期待をやぶりやがったよ？変態クソスケベナスビとして

語られてゆくのはこいつに決定！やったね俺より上が！

「師匠！　この方が魔法の使い方を教えてくれとのことですよ」

いろんなこと思ってたら話が進んでた。

「んあ？おお！アイシクル！　久しいな〜。」

ぱつと見だけでも感じ取れる。こいつやっぱ変態オヤジだ！と。

「で？そいつは誰だ？」

「はい。この方はりゅ……」

止まった。竜人族といいそうになったのを止めたみたいだ

「この方はあの魔族でもハーフでも一撃の魔装銃『サタン・スレイヤー』」

を心臓に4発うつたのですが死ななかつた人ですよ！」

さ、サタンスレイヤーで……サタンて魔王でとっていいよね？

魔王破壊の銃！？……俺が勇者の力もなかつたら死んでたよね？

やっぱりこいつ危険だ……

「なに！ あの銃でうつて死なんかったのか……」

ドスッ！

心臓を躊躇いなくひとさし。

「いつ！ ！ たあああああああ！」

もう一回行っておこうか？ 傷は治るし、死なない。でもね、痛さはそのまま。

「おお！ 本当に死なん！」

こっちの痛さは無視して感動してるし。師弟そろって非常識な……

「どうなっとなんだか……この魔剣『サタン・ソード』でも死なんとは」

サタンソードって今度は魔王の剣かい？ 勇者だけだったらしんでたな……

はい疑問……なんでそんな危ないもの持ってるのって

「ぎゃあああああああああ！！！！」

疑問を口にしようとしたときやってくれました。

心臓切り刻み 俺超痛いてか死ぬ感じを生きてる状態で味わわなきゃいけない。

んでもって頭（脳）6連射 普通死ぬ痛みを二箇所からつけて俺は生きてなきゃいけない

生き地獄！

んで！気絶……

第6話 師匠に会おう！（後書き）

なんか短いけどまたしてもテスト。  
しばらくこんな感じになりそうです。

第7話 番外(?) アイシクル編(前書き)

今日はちょっとしたおふざけ番外?みたいなのです

昨日12月19日さりげなくタイトルかえてます

## 第7話 番外(?) アイシクル編

【SIDEアイシクル】

今日はいい天気だ。

こんな日は外で通りかかった人を狩る……名付けて「運が悪かったね! さようなら」をして時間でも潰しますか。

なにか恐ろしいことを考えているのは雪エルフ、アイシクル・フルトニー

年齢17歳にして身長120cmのドチビ「殺すよ?」。……ちなみに彼は魔法科学者の博士号を

取るほど頭がいい。彼曰く僕に解けない呪いはない! と言っていることから

わかるかもしれないが彼は解呪がだいの得意。

そんなことはさて置き、これは年齢の割にはちっちゃい「うるさいけど?」奇妙な考「奇妙じゃない!」……えをもつ

奇妙な「物語じゃないからね?」……

説明(?)に出てきているアイシクルの言葉はス「スルーしちゃだめだよ? 読者のみんな」ルーして……

……  
うるさいやつめ! これじゃはなしがすすまんじゃないか!

魔術師(嘘)のポチの恐ろしさ見せてくれる!

だ ま れ ! 直訳しよう! この綴りはだ「だまれでしよ?」

……  
僕の作品が反乱起こしたよ! グス「キモイよ?」……ん

もういいや僕泣いちゃう。

1時間後

はい！司会かわりまして解呪得意のアイシクルです！

すみませんさつきまで司会していた馬鹿（重要）がなかなかマイクから手

を離さないののでつい時間が……

さっきのどごその馬鹿（これ重要2回目）が申しとおりましたことはお忘れください。

それでは僕視点の新鮮かつ僕の考えをお楽しみください！

「さて、せっかくのいい天気なんだしどっかに実験体はあるいてないかな？」

フンフン と鼻歌をうたいながら歩く僕。

まわりの女の子が可愛い僕をチラチラ見ている。照れるな（"）

うん？ほかのお話と違って顔文字やらがある？

馬鹿（重要3回目）と僕は違っておしゃれ屋さんだかね

「んー、にしてもなかなか実験体があるいてないな？」

色々なことを考えながら周りを見渡す。

仕方ないし日を改めようか……ん？

上の方からバツバツサと音が聞こえてくるではありませんか！

「うふ、うふふふふふ。」

おっといけないつい実験体を見つけて喜んでしまった。  
あいつは空を飛んでるみたいだし早く撃たなきゃ。

そう思って急いで手にもった魔装銃「サタン・スレーヤー」を構える

僕は魔術だけではなく射撃も腕がいいんです！  
狙いを定めて……

バン！

お！心臓に見事あたりましたね。

あ、おちてき、た

「な！ 馬鹿な……確実に心臓を売ったはずだぞ！」

確実に仕留めたはずなのに実験体は痛い！とわめいている。

もう一度撃ちますか。

「おいてめえ……どいゆうつもりだ？いきなりう」

バンバンバン！

？いまなにか喋りかけてきたような？まあ僕が気にすることでもない  
さてやはりこれに耐えきれぬものはいな

「だ・か・ら……どいゆうつもりだああ！」

訂正、いましたね……

「……どうなっているんだ？あの銃弾にはハーフ、魔族とわず一撃で殺せるように

魔法を付けていたんだが……」

フム、謎ですね……

なにか相手がわめいていますますが適当に流しておきましょう  
大人の対応ってやつで

「 チビガキじゃ  
」

チビガキ？……ほかの部分はよく聞こえませんでした（聞いてないのまちがい）

「チビ……ガキ……」

よし、殺しますか（無理すん）さっきからつざいですよ？低脳め（準備完了。うるさい声も黙らせましたし

「 Eis （氷）  
regnen（降る）  
」

「【アイスランチャー】」

魔法で殺す！

さあ！みんな華麗でカッコ良くなおかつ可愛い私の活躍はまだまだ  
つづ「本編を進めたいのでこのあとは後ほど」

……あ・の・やろおおおおおおお！

おいしいところを奪い取る！

作者の力、甘く見てもらっては困りますよ？アイシクルちゃん

第7話 番外(?) アイシクル編(後書き)

さあさあアイシクルの言いたいことがこのお話で分かればあなたはすばらしい!

でも無理だろうね……

はい、実はアイシクルは勇也のことを竜人ではないと疑っております。

理由は、魔術最強、武術最強の竜人なのにバリアの張り方すらしない。

このことから彼はジミーに勇也を疑っていたり……

まあ気がむいたら口うるさいドチビやる「だれがドチビだって?」

(。°。°。°)ど、どうやってでてきた?

「出番取りやがってー!」

ぎゃあああああああああ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5305z/>

---

本業：学生、副業：勇者と魔王やっとります（前、俺のジョブは勇者と魔王

2011年12月21日01時52分発行